



Handwritten text in a cursive script, likely a title or author's name, written vertically on a rectangular label.

下





中納言いさのみふのちうらふれあふはら
 うは、をのこともらむをよつとらうと
 のすくひきうらひはきやよはれぬまを
 うけたりたりて

石上諸貴イノカミモロキ 姓氏録曰神饒速日
 命之後也物部連公麻侶賜物部朝
 臣姓改賜石上朝臣姓ウツクサ 鷲ウツクサ 順和
 名云豆波久良米

何のやうのあんとあつての
 うまやうはばらうまのまはらやす
 たいとらんねうなりやのうま
 何社うらうらうのやと具ハ史

記三代世表第一云詩傳曰湯之先
 為契無父而生契母與姊妹浴於玄
 丘水有燕銜卵墮之契母得故含之
 誤吞之即生契索隱曰按史所引出
本紀云玄鳥翔水遺契生而賢堯立
卵城簡狄取而吞之為司徒姓之曰子氏子者茲茲益大
 也詩人美而頌之曰殷社詩云
 天命玄鳥降而生商商者質殷號也
 予按又此說牽涉於三才圖
 會云石燕出零陵郡形似蚶而小或
 云生山洞中因雷雨則飛出墮於沙
 上而化為石今人以催生令婦產兩

抄下

手各握一枚須臾子即下採無時本
 草綱目曰玄鳥至時祈高禱可以求
嗣西京雜記元后在家嘗有白燕
 含白石大如指墜后續筐中后取之
 石自剖為二其中有文曰母天地后
 乃合之遂復還合乃寶錄焉後為皇
 后云

竹取抄
 竹取抄
 竹取抄

工トモ敷来テ修理シケ
 ルニ○盗人ノ裁衣ヲ剥
 ントレツレハ盗人ノ尻
 ラフタト蹴タリツレバ
 其盗人ノ蹴ラル、マ、
 ニ俄ニ失ヌルナリ○僧
 止彼レハ黒ク装ヒツル
 男ナリト宣ヘハ人叢麻
 柱ニ上リテ見レバ麻柱
 ニ落セテリテ可動様モ
 ナクテト云レバ流シ
 一、ちのちのちのちのち
 そのふちと竹の節の
 陰をえけししよとあ
 ちろよあけしるま
 か

作具部云辨色立成云麻柱阿奈三
 代実録第卅八元慶四年十二月四
 日右大臣基經太政大臣奈比よち給ふ
 宣命曰政乎相安奈助奉母久奈利
 とあまうぞあなひハ支サらるる
 名づけしるま
 ほむらあもゆのあまののむらあ
 ふねおちるまのほりあま
 めるあまのあまのあまのあまの
 いのちあまのあまのあまのあまの
 まの友人あまの丸あまのあまのあまの
 うけあ

敏達紀 概計

懼おそ 川の傍を 大炊寮の官人し
 くりつ丸
 こやを具とらんとおぼしめさざだ
 ちのちあまのあまのあまのあまの
 まのち油をひくをあまのあまの
 ろい給つるあまの丸がまのあまの
 れつるあまのあまのあまのあまの
 づわくあまのあまのあまのあまの
 ちあまのあまのあまのあまの
 一、九二十人のほりてけしあまの
 まのあまのあまのあまのあまの
 聚首ヒメシラハセテ あまのあまのあまのあまの
 海をほよ

竹取抄

夜去... 御服... 天智紀... 其... 賜... 爵... 祿...

夜去... 御服... 天智紀... 其... 賜... 爵... 祿...

古事記... 取... 伊豆... 志... 河... 之... 河... 島... 一... 節... 竹... 作... 八... 目... 之...

古事記... 取... 伊豆... 志... 河... 之... 河... 島... 一... 節... 竹... 作... 八... 目... 之...

あつたてまつりて
むらさきとわかし
わらわのあはれ
あつたてまつりて

あつたてまつりて
むらさきとわかし
わらわのあはれ
あつたてまつりて

あつたてまつりて

あつたてまつりて

あつたてまつりて
むらさきとわかし
わらわのあはれ
あつたてまつりて
あつたてまつりて
むらさきとわかし
わらわのあはれ
あつたてまつりて

竹取抄

あつたてまつりて

あつたてまつりて
むらさきとわかし
わらわのあはれ
あつたてまつりて

あつたてまつりて

あつたてまつりて

あつたてまつりて

あつたてまつりて

あつたてまつりて

あつたてまつりて

あつたてまつりて

あつたてまつりて

あつたてまつりて

あつたてまつりて

あつたてまつりて

竹取抄

してといふは... 日本紀
 不賢不敏...
 大伴の大...
 此...
 一...
 か...
 あ...

禁中... 死...
 九...
 八... 日本紀...
 而雷声大鳴...
 第一柱...
 部卿藤原清...
 夫... 民部卿朝臣...
 部至陽明門...

終...
 わ...
 違例 ^{三十一} あ... 順和名云韓櫃
 ひ...
 あ...
 あ...
 人の...
 お...
 よ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...

持...
 無...
 う...
 う...

ま...
 と...
 う...
 せ...
 か...
 中納言
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...
 あ...

うきをよみ此やうふあんと
こころのすしめりしをわが
あはれはののちのあはれな
ばんこしきこころい
つゆそと後より又父子
不責善の孝れ

あはれはめれあはれやう・門のあして
のこころし事かへしとのおまをいと
しむくはよるこぼるこもあらうめ
は子のやうにあげどいゆらさうごし
かたおろそこわまるやうよりいんば
こころのまよしをせあはれ
おろそせん ちよれ使ねだらさう
よつでかしこ かなこ 畏
恐有万葉 君の仰とおそりこいさ
とたのり いんをさうこぎよ 弱
とよまおろやあたのくたはま
らさうあまこいんうがよれあうりて

竹取下十

あまをなご子なれとこころのまよと
えちぬし 薄情
わしーのちたぬらぬとあはれ
このまはなむとむちいんては
おまをいぬふとあはれとあはれ
あはれあはれいんとなりてあはれと
おまをいぬあはれとあはれとあはれ
いんていんあはれとあはれとあはれ
あはれとあはれとあはれとあはれ
人のいぬあはれとあはれとあはれ
あはれとあはれとあはれとあはれ
あはれとあはれとあはれとあはれ
あはれとあはれとあはれとあはれ

竹取抄

ハシラケルニハシラケル

世にござらばいさくあてきさくわが国を
せ給ひてくわさくくわさくまてかてお
らしよさんそまて

まうにまうてあややの歌きりく
室中よみはくふし
てり 山門のちぢんまうてまて
うらんしきりあや

あややあさくくくさくまがのさ
ハハ國のまうまうまうまうま
うんくうあつわてあうまうま
まがはんまうまうまうまうま
らんまうあてまうまうまうま

最將

(254)

とらけー 興計日本死
とらけー 八柄惜のまえ

しきまをきりまはあやひめいさ
うげまうりぬぼくくまうま
ぼくくまうまうまうまうま
まうまうまうまうまうま
いづもまうまうまうまうま
あややひめまうまうまうま
まうまうまうまうま
まうまうま 屹あややまうま
ち歌のあくなるてまうま
なり。太平廣記よ素の始皇温泉
まうまうまうまうま
天女あうまうまうま

こと、舊本今昔物語卷廿
三行土佐國掘金訣
急くまうまうま

竹取抄

百官ハ職存抄云孝徳天皇
 大化元年始置八省百官
 之百官非官有百之謂
 謂官數之多也也
 百官ハ職存抄云孝徳天皇
 大化元年始置八省百官
 之百官非官有百之謂
 謂官數之多也也

此の事は...
 大化元年始置八省百官
 之百官非官有百之謂
 謂官數之多也也

万十二...
 万十二...
 万十二...

万十二...
 万十二...
 万十二...

此の事は...
 万十二...
 万十二...

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a short story. The text is written vertically on the right page of the open book.

Handwritten text at the top of the right page, possibly a title or a reference.

竹取抄

Handwritten text at the top of the left page, possibly a title or a reference.

Handwritten text in a cursive script, continuing the text from the right page. The text is written vertically on the left page of the open book.

竹取抄

無縁

此の御座りては
 御座りては
 御座りては
 御座りては
 御座りては
 御座りては
 御座りては
 御座りては

御座りては
 御座りては
 御座りては
 御座りては
 御座りては

御座りては
 御座りては
 御座りては
 御座りては
 御座りては
 御座りては
 御座りては
 御座りては
 御座りては

御座りては
 御座りては
 御座りては
 御座りては
 御座りては
 御座りては
 御座りては

御座りては
 御座りては
 御座りては
 御座りては
 御座りては
 御座りては
 御座りては
 御座りては
 御座りては

日本紀 可美 可伶

Handwritten Japanese text in a vertical column, starting with a small header and followed by several lines of cursive script.

竹取下二子

日本紀 可美 可伶

Handwritten Japanese text in a vertical column, starting with a small header and followed by several lines of cursive script.

竹取抄

不裁京 具多物色ひ
てわて力をとてかたけは
はやくはやくまへ思
ひよ

月をそよぐ

源氏物語 木乃かなん
そよぐそよぐかれは

莫對月明思往事損君顏
色減君年

思ひよめくかたけに
たれ事思はばかきつらふ
今もあはれとて思ふは
かたけの思ふはかたけ
月をそよぐもてあはれ
かたけの思ふはかたけ
かたけの思ふはかたけ
かたけの思ふはかたけ
かたけの思ふはかたけ

思ひよめくかたけに
たれ事思はばかきつらふ
今もあはれとて思ふは
かたけの思ふはかたけ
月をそよぐもてあはれ
かたけの思ふはかたけ
かたけの思ふはかたけ
かたけの思ふはかたけ
かたけの思ふはかたけ
かたけの思ふはかたけ

思ひよめくかたけに

思ひよめくかたけに
たれ事思はばかきつらふ
今もあはれとて思ふは
かたけの思ふはかたけ
月をそよぐもてあはれ
かたけの思ふはかたけ
かたけの思ふはかたけ
かたけの思ふはかたけ
かたけの思ふはかたけ
かたけの思ふはかたけ

思ひよめくかたけに
たれ事思はばかきつらふ
今もあはれとて思ふは
かたけの思ふはかたけ
月をそよぐもてあはれ
かたけの思ふはかたけ
かたけの思ふはかたけ
かたけの思ふはかたけ
かたけの思ふはかたけ
かたけの思ふはかたけ

相書よ私言とて
異記又唯まよふ万葉
耳言とてまよふ万葉
よの月義

八月十五はなつめのかたけの思ふはかたけ
かたけの思ふはかたけ
かたけの思ふはかたけ
かたけの思ふはかたけ
かたけの思ふはかたけ
かたけの思ふはかたけ
かたけの思ふはかたけ
かたけの思ふはかたけ
かたけの思ふはかたけ
かたけの思ふはかたけ

狹くよけのこまうふこほ
 つれいばいれおのく
 もいそくうおらうら
 らいこ

かろやねがさうしつうのまもてさうさ
 んとちゆひしつうもあまうあうん
 まもしつうもあまのそやまもひく
 今まもてさうしつうはさうらわさうさ
 やいそくうらうらうらうらうらうら
 けい國の人よもあまのそやのそや
 ねんちやわ

月れみやこ 起世經云佛告比丘
 月天子宮殿縱橫正等四十九由旬
 四面垣牆七寶所成月天宮殿純以
 天銀天青瑠璃而相間錯二今天銀
 清淨無垢光甚明曜餘之一分天青

瑠璃亦甚清淨表裏映徹光明遠照
 亦為五風攝持而行亦云於此月殿
 亦有大輦青瑠璃成輦高十六由旬
 廣八由旬月天子身與諸天女住此
 輦中以天種五欲功德和合受樂
 隨意而行月天子身壽五百歲子孫
 相承皆於彼治云又龍城錄曰開
 元六年上與申天師道士鴻都客八
 月望日夜曰天師作術三人同在雲
 上游月中過一大門在玉光中飛浮
 宮殿往來無定寒氣逼人露濡衣袖
 皆濕頃見一大官府榜曰廣寒清虛

之府其守門兵衛甚嚴白刃粲然望
 之如凝雪時三人皆止其下不得入
 天師引上皇起躍身如在烟霧中下
 視玉城崔峩但聞清香藹鬱下若萬
 里瑠璃之田其間見有仙人道士乘
 雲駕鶴往來若遊戲少焉步向前覺
 翠色冷光相射目眩極寒不可進下
 見有素娥十餘人皆皓衣乘白鸞往
 來舞笑於廣陵大桂樹之下又聽樂
 音嘈雜其甚清麗上皇素解音律孰
 覽而意已傳頃天師亟欲歸三人下
 若旋風忽悟若醉夢中迴尔次夜上

皇欲再求往天師但笑謝而不允上
 皇因想素娥風中飛舞袖被編律成
 音製霓裳羽衣舞曲自古洎今清麗
 無復加於是矣

みるるをなんむしりのちさうありる
 ようちなんはさ界よそまうてさ
 〜〜〜

若と素子の因縁ありて志ちうて身

せむらせしよなわち

いふふふふふふふふふふふふふふふふふ
 十五日にちののののののののののののの
 まうてらんぞはしむまうてらんぞはしむ

なごねのー和名鈔云蔓菁蘇故本草注云蘇菁和名

ごよわおもしなごねの竹の
びくこいごねなれを
ひんがしはふたふたごねの
中らわ入してごねの竹の
きりり大いおもしろいけだし
さらさらとわごねの竹の子
をゆくごねの竹の子をゆく
んやせりてごねの竹の子をゆく
ゆききりきりごねの竹の子
ごねの竹の子ごねの竹の子

(抄下廿四)

阿乎古事記用菘字
菘菁之子或菘子俱謂菘
種下

長の翁とひさしとひさし
そととひさしとひさしとひさし
らんやとひさしとひさし
あつちとひさしとひさしとひさし
ありてひさしとひさしとひさし
ごねの竹の子ごねの竹の子
天上の翁とひさしとひさし
ごねの竹の子ごねの竹の子
ごねの竹の子ごねの竹の子
ごねの竹の子ごねの竹の子
ごねの竹の子ごねの竹の子
ごねの竹の子ごねの竹の子

竹取抄

革命之後也

ほのむの上よー和名鈔云

淮南子云舜作華壇和名

加岐一云築土、茂敷

夜のくおほふはよ

竹取の歌人も合せてし

まはしんくしつたてし

伊勢おれしむせしむし

なまらぬおれしむせしむし

おむのの四よち母屋内

契沖云古語は母とち

くまらぬしむせしむし

こゝろかたふしむせしむし

しむせしむしむせしむし

あまらぬしむせしむし

まゝしてろくちのつゝとあをせてこ子

人の人を竹とりつゝあをせて

高野大國タカノオホクニ 差サレテ ころも守ころく

ちをた右近奉た右衛門た右兵衛

あをせてしロクテ 律ノリ なる

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

築地ツクリチ 母屋オモエ 番バン

あまらぬしむせしむし

竹取下廿七

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

竹取抄

蚊飛蟻乳

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

あまらぬしむせしむし

翔カサ

ついでにやあやけ
ついでにやあやけ
ついでにやあやけ
ついでにやあやけ
ついでにやあやけ
ついでにやあやけ
ついでにやあやけ
ついでにやあやけ
ついでにやあやけ
ついでにやあやけ

はぐらも出かしてくもくちうわのう
まはれまうしつておかしはるまねを
ぬらまわしなんがうおまひたうま
けらぬをのこらだうしてさうな
ん事ののぶく九つてくけら
はぐらもいでかくまのころよりた
まはれまうしつておかしはるまねを
ぬらまわしなんがうおまひたうま
けらぬをのこらだうしてさうな
ん事ののぶく九つてくけら

付取下三十

老若ともくちあやけ
不老もくちあやけ
不老もくちあやけ
不老もくちあやけ
不老もくちあやけ
不老もくちあやけ
不老もくちあやけ
不老もくちあやけ
不老もくちあやけ
不老もくちあやけ

付取抄

酉陽雜俎天上有憶念樹物隨意而
生多門天又生樹人衣樹
ありて身をくんと衣樹ありて衣
をまはれまうしつておかしはるま
ねをぬらまわしなんがうおまひ
たうまけらぬをのこらだうしてさ
うなん事ののぶく九つてくけら
はぐらもいでかくまのころよりた
まはれまうしつておかしはるま
ねをぬらまわしなんがうおまひ
たうまけらぬをのこらだうしてさ
うな

天人の使

万十、傳云、竊薄之後還期
寄物、俗云加
多美

人同よらふ所、縁あつたつておぼを
えんまもてをさしてあつたつて
事、此はいなさつてし
形見集 万葉
記念 遊仙

天人の中よらふ所、縁あつたつておぼを
えんまもてをさしてあつたつて

酉陽雜俎、天人衣、無經緯、又比紅
兒詩、又、天人の衣、之、重さ、とい、殊と云し
搜神記、曰、豫章、新喻縣、男子、見、田中
有、六七、女、皆、衣、毛、衣、不、知、是、鳥、人、
匍、往、得、一、女、所、其、解、毛、衣、取、藏、之、即
往、就、諸、鳥、諸、鳥、各、飛、去、一、鳥、獨、不、得

竹取下卅五

去、男子、取、以、為、婦、生、三、女、其、母、後、使
女、問、父、知、衣、在、積、稻、下、得、之、衣、而、飛
去、後、復、以、迎、三、女、女、亦、飛、去、是、亦、
お、衣、の、類、な、ら、う、と、い、は、れ、し、
此、お、心、も、つ、て、お、心、も、つ、て、お、心、も、つ、て、
ま、あ、ら、は、不、死、の、薬、入、り、
不死の薬、い、は、れ、し、
月中の兔、
異域志、曰、長、生、國、在、穿、胸、國、之、东、其
地、有、不、死、樹、食、之、則、壽、有、赤、泉、飲、之、
不、老、云、云、張、衡、靈、憲、志、云、羿、得、不、死
之、藥、於、西、王、母、嫦娥、竊、之、以、奔、月、將

竹取抄

往_下枚_下莖_下之_下於_下有_下黃_下有_下黃_下占_下之_下曰_下吉_下翩
 翩歸_下妹_下獨_下將_下西_下行_下達_下天_下之_下晦_下也_下母_下驚_下
 母_下恐_下後_下旦_下大_下言_下婦_下娥_下遂_下託_下身_下於_下月_下是_下
 為_下蟾_下蜩_下。

此歌は... 日本紀... 織土の... 天... 思...

此歌は... 日本紀... 織土の... 天... 思... 蟾蜍...

(425-426)

三人あま... 日本紀... 思...

三人あま... 日本紀... 思... 官家...

竹取抄

面皆海一。采直上。頂有火烟。秦時徐福入海求藥。終止此。至今子孫稱秦氏。

氏

此都もちの九。天もちかく。竹らとそら

そらもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

はねもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

あふもちの九。天もちかく。竹らとそら

秘苑抄云富士の十名をあげて云
 藤嶽 鳴澤高根 常磐山 塵山
 二十山 三重山 新山 見出
 山 三上山 神路山
 都良香記云山頂中央窪下體如炊
 甑甑底有神池亦其甑中常有氣蒸
 出其色純青窺其甑底如湯沸騰其
 在遠望者常見烟火云云
 又級は記よりふふのこらふとま
 みえぬくこらなり。はまのや、なまの
 れもこのらんちやうややうと
 うなるよちれきゆさきなく。に

ちうきんちうしんこせうめいさう
 あんんちうしんちうにみえて山
 れいしんちうのこらふとま
 ようちうちうのこらふとま
 火のこらふとまみゆとま
 清異録曰吳越孫總監承佑富傾霸
 朝用千金布得石緑一塊天質差峨
 如山命匠治為博山香爐峯尖上作
 一暗竅出烟則一聚而且直穗凌空
 实羨觀視親朋傲之呼不二山云云
 ちうちうちうの燈ふとま
 賞とま

昌喜梅よび抄法を原氏他
 などりつ後あるとひつとを
 ちりつし原氏結念のそり
 竹取物語のつれづれのそり
 みまは記考のそり
 河海抄云巨勢相覧一説云
 巨勢金岡相覧同人也云
 高名録者相覧八代先代
 也云花鳥餘情云巨勢相
 覧八金岡子云金岡八寛
 平之時之人為其子則可為
 貴之同時人云弄花抄云
 金岡子也除自成文抄云廣
 岐小目後八位下畫師巨勢
 朝臣相見昌泰二年二月除
 目執筆時平公云順の仇
 なるハ相見也云云
 幸依とハいふ云云
 正長の仇既云云
 かつやうなハ相見也云云
 かさうと云う云云

竹取物語源起
 契沖河原系も其情聞を考へて
 其作者を論せども古人の傳説も
 源氏の所作とすべし
 人なるていふも思ふ所あり
 順の略傳をも考へて
 弘仁天皇 サタ 定 始賜姓源 至 從四
 左京大夫 攀 順 從五位上 能登守
 順の傳説も考へて
 契沖河原系も其情聞を考へて
 其作者を論せども古人の傳説も
 源氏の所作とすべし
 人なるていふも思ふ所あり
 順の略傳をも考へて

（中下四十一）

順の仇と云はれハ非ざる
 河海抄云云
 内付の仇と云はれハ非ざる
 和雅云云
 上云云
 内付の仇と云はれハ非ざる
 一説なり
 而は云云
 先のおおなり
 予が古抄に
 抄云云

契沖河原系も其情聞を考へて
 其作者を論せども古人の傳説も
 源氏の所作とすべし
 人なるていふも思ふ所あり
 順の略傳をも考へて
 契沖河原系も其情聞を考へて
 其作者を論せども古人の傳説も
 源氏の所作とすべし
 人なるていふも思ふ所あり
 順の略傳をも考へて

三蔵の生草を判依論師
云々也。展轉を寫の功り
其又付て受習く、智更
其切くは付たり。今按
日本紀云其所棄竹乃
終成竹林故号彼地曰竹
屋也。又遂登長屋之竹
島也。又竹葉懶んをオ
そらハ竹河といふ所の
ハタカといふ所のハ
訓なる。一だハ酒も下
ニありてハ一夜百醇酒
いの上もあそて酒槽酒
蟻といふ。今も白
酒酒宴かといふ。仙覺
美草末おろし多トリと
せしむ。ハは物也。彼美
葉の箱う名よりおろし
るゆきを古丸をなして
たつてしよへくそ

よとつちりし。こもつちりし。てあ
すこ出でし。已上

古老傳曰此山麓垂馬里有老翁愛鷹
孃飼犬後作箕為業竹節間得少女
容貌端嚴光明照耀爰桓武天皇御
宇延曆之比諸國下宣旨被招美女
坂上田邑麻呂為東國勅使富山裾
老翁宅宿終夜不絕火光尚子細是
養女光明也云田邑麻呂即上洛奏
事之由於是少女登般若山入巖岨
畢帝幸老翁宅翁奏由緒帝悲泣脫
帝王冠留此處登頂上臨金岨少女

(竹下四)

又此物流を一名蘇夜毗
物流といふ。源氏物語に
みかみもつてわのののの
も物流物流の流の流の
のののののののののの
のののののののののの

天智天皇欽一富士金
岨へ入玉ノ此帝欽
詞林採葉此流流も。天
智紀云十年九月天皇寢
疾不豫成林○十二月癸
亥朔乙丑天皇崩于近江
宮癸酉殯新宮云々國史
めは是の流の流の流の
築後い流信用もつた
由何はるれくもの巡歴記
とつちりし。は人の外古き物
は引用せし。はをををの
といふ

出向微笑曰願帝留此帝即入岨訖
王冠成石在于今彼翁者愛鷹明神
也孃者飼犬明神也 已上 今考之云
當山縁起之上者仰雖可信用之時
代甚不審也疑若天智天皇欽彼帝
近江宮ニテ崩レ玉フトイヘ氏実
ハ不然白地ニ御馬ニ名テ出マシ
テ隱玉ヲ所ヲシラス宇治山ノ麓
ニ御鞋片落コレヲ取テ山陵ニ籠
夕テマツル鞋石トテ長三尺許有
之富士金岨へ入玉ハ此帝欽可
詳鴨長明巡歴記云取此山ノ傍ニ

舊本今昔物語卷廿八云今昔。天皇御代二一ノ翁有ケリ竹ヲ取テ籠ヲ造テ要スル人ニアタヘテ其功ヲ取テ世ヲ渡ケルニ翁籠ヲ造ラシガタメニタカムラニ行竹ヲ切ケルニ篁ノ中ニ一ノ光アリ其竹ノ節ノ中ニ三寸ばかりナル人有。翁是ヲ見テ思ハク我年来竹取ツルニ今カハル物ヲ見付タルヲヲヨロコヒテ片手ニハ其小人ヲ取今片手ニハ竹ヲ荷テ家ニ帰テ妻ノ姫ニ篁ノ中ニテ此女子ヲコソ見付タレト云ヒケレバ姫モ悦テ初ハ籠ニ入テ養ケルニ三ノハカリヤシナヒケリ例ノ人ニナリ又其子ヤウアウ長大スルマニ世ニナラビナク端ニシテ此

採竹翁ト云者アリ宅後ノ竹林ニシテ鶯ノ卵子ヲ得タリ養テ子トス少女トナリテ身ノカタハララテラス百媚アリ見人斷腸聞者心ヲ動スコレヨリシテ青竹ノ中ニ黄金出来テ貧翁忽ニ富人トナリニケリ英華ノ家好色ノ道月卿爭先雲客重光艶言ヲツクリ戀懷ヲ抽ツ時ノ帝殿聞ニオヨヒテ御狩遊ノ由ニテ姫ノ竹亭へ幸アツテ鶯ノ契ラムスビ松ノ齡ヲヒキ玉フ竹姫後日ヲ契リ申ケレバ帝空

竹取下平四

世ノ人トモ覺サリケレバ翁姫イヨクコレヲカナレ三愛レテ傳ケル間ニ此世ニ聞エタカク成ニケリ而ル間翁亦竹ヲ取ランガ為ニ篁ニ行又竹ヲ取ニ其度ハ竹ノ中ニ金ヲ見付タリ翁此レヲ取テ家ニ帰又然レハ翁忽ニ豊ニ成又居呀ニ宮殿樓閣ヲ造テ其レニ住ニ種々ノ財庫倉ニ充テ満テリ眷屬衆多成又亦此兒ヲ儲テヨリ後ハ事ニ觸レテ思様ナリ然レハ弥ヨ愛シ傳ク丁無限レ而ル間其時ノ諸ノ上達部殿上人消息ヲ遣テ假借シケルニ女更ニ不聞リケレハ皆心ヲ盡レテ云セケルニ女初ニハ空ナル雷ヲ捕ヘテ將來レ其時ニ會ハムト云ケリ次ニハ優曇華ト云花有

ク返玉フカタヘノ天是ヲレリテ飛車ライダレテ迎テ天ニ昇リメ鶯姫帝ノ御契ノサスガニ覺テ不死ノ藥ニ歌ヲ書副テ留テケリ其歌ニ云
今ハトテアマノ羽衣キル時ゾ君ヲアハレトオモヒイデヌル
帝御返歌
逢コトノ泪ニウカブ我身ニハレナ又藥モナニカハセン
勅使智計ヲメグラレテ富士ノ嶺ニノボリテ此藥ヲ燒アゲリト

ケリ其レヲ取テ持来レ然
ラム時ニ會ハムト云ケリ
後ニハ不^カ打ヌニ鳴ル鼓ト
云物有^カ其レヲ取テ得サセ
タラ^カ折ニ自ラ聞エムナ
ド云フテ不^カ會ガリケレバ
假借スル人ノ女ノ状形ノ
世ニ不^カ似^カ微^カ妙^カナリケルニ
就^カテ只此ク云ニ隨テ難^カ堪
キ事ナレドモ旧ク物知タ
ル人等ニ可^カ求^カキ事ヲ問ヒ
聞テ或ハ家ヲ出テ海邊ニ
行^カ或ハ世ヲ捨テ山ノ中ニ
入リ此様ニシテ求ケル程
ニ或ハ命ヲ亡シ或ハ不^カ返
来ヌ輩モ有ケリ而ル間天
皇此女ノ有様ヲ聞シ食シ
テ此女世ニ並^カ無ク微^カ妙^カシ
ト聞我レ行テ見テ實ニ端
正ノ姿ナラバ速ニ后トセ
ムト思シテ忽ニ大臣百官
ヲ引將テ彼翁ノ家ニ行幸

仍テ此山ヲ不死山ト云ケルヲ郡
ノ名ニ付テ富士ト申ケルナリ已
詞林採
葉抄
國名風土記曰甲斐國トハ昔ハ富士
山ノ麓ニ竹取ノ翁トテ竹ヲ種テ
アキナヒケル者アリ彼翁園生竹
林ニシテ鶯ノ卵ヲ見付タリ暖メ
置クソノチ程ヲヘテ是ヲミレ
バ容顏優ナル寵姫トナリケリレ
カルニカレラ養子トス夕ケレ後
ニカノ翁ガ田作りケル時ニ暇ナ
カリシカバ養母ノ訟ヘテイハク

〔抄取下四十五〕

アリケリ既ニ衛マレ着タ
ルニ家ノ有様微妙ナル事
王ノ宮ニ不^カ思^カズ女ヲ召出
ルニ即參レリ天皇此レヲ
見給ニ實ニ世ニ可^カ譬^カ者無
ク微^カ妙^カナリケレバ此我ガ
后ト成ラムトテ人ニハ不^カ
近付ザリケルナメリト喜
ク思シ食テヤガテ具シテ
宮ニ返テ后ニ立テムト宣
フニ女申サク我レ后トナ
ラムニ無限^カキ喜ヒ也トイ
ヘ氏實ニハ己人ニハ非^カ又
身ニテ候也ト天皇宣ク女
子然ラハ何者ゾ鬼カ神カ
ト女ノ云ク已鬼ニモ非^カス
神ニモ非^カス但シ己ヲハ只
今空ヨリ人来テ可^カ迎^カキ也
天皇速ニ返ラセ給ヒ子ト
天皇此レヲ聞給テ此ハ何
ニ云フ事ニカ有ラム只今
空ヨリ人来テ可^カ迎^カニ非^カス

隙ナキ時ニシモ何トカヤ手助ト
ナリ玉ハザルトナサケナク云ケ
レバ鶯姫コレニ怒ヲナレテ富士
山ノ三子ニノホリテ岩ヲ蹴破テ
湯ヲ走ラカレ田ツクル人ノ所三
十焼石トナル件ノ祖父母ハニケ
テ白根ガ三子ヘユキ又彼田力ケ
ル馬モニケテ信州駒ガ三子ニス
三ケル其駒主ヲワスレズ常ニナ
レシカバカノ馬ヲコ、ロニ入テ
飼レユエナリ此トコロヲ飼國ト
云シカルヲカナガキニ甲斐トカ

此乃... 風土記ニ馬ラ心ニイレテ
飢レユ工飢ノ國ト云レテ
カナカキニ甲斐ト書トイ
ルハ

今按本朝逸史引類聚三
代格曰天長四年十月甲
辰大政官符置甲斐國牧
官○此國所領牧与信濃
國同頃年著思漸多繫創
歲倍云々是ホヨリ付
会レ汝ガク古事記云
開化帝皇子日子坐王之
子本朝古王者日下部

連甲斐國造之祖云景
行紀云自日高見國遷之
西南歷常陸至甲斐國
飢國と云々事ハ一伝
山間此國なり峡ハ加比
故名と云々云といフ

醍醐以灌柰根日灌之到至明年
實乃甘美如王家柰而樹邊忽復生
一瘤節大如手拳日增長梵志心
念忽有此瘤節恐妨其实適欲斫去
復恐傷樹連日思惟遲廻未決而節
中忽生一枝心指上向洪直調好高
出樹頭去地七丈其杪乃分作諸枝
周圍傷出形如偃盖華葉茂好勝於
本樹梵志怪之不知枝上當何所有
乃作棧閣登而視之見枝上偃盖之
中乃有池水既清且香又有衆華彩
色鮮明披視華下有一女兒在池水

拾取下四七

中梵志抱取歸長養之名曰柰女至
年十五顏色端正天下無双宣聞遠
國有七國王同時俱來詣梵志所求
婢柰女以為夫人梵志大恐怖不知
當以與誰乃於園中架一高樓以柰
女著上出謂諸王曰此女非我所生
自出於柰樹之上亦不知是天龍鬼
神女耶鬼魅之物今七王俱來求之
我設與一王六王當怒不敢愛惜也
女今在園中樓上諸王便共議有應
得者便自取去非我所制也於是七
王口共諍之紛紜未決至其夕夜萍

莎王從伏竇中入登樓就之共宿明
晨當去奈女白曰大王幸枉威尊接
近於我今復相捨而去若其有子則
是王種當何所付王曰若是男兒當
以還我若是女兒便以與汝王即脫
手金銀之印以付奈女以是為信便
出語羣臣曰我已得奈女與共一宿
亦無奇異故如凡人故不取耳萍莎
軍中皆稱萬歲曰王已得奈女六王
聞之各還去畧めちよ奈女男子成
生やうそ又稱と休醫王著波とそ
なり又廣博物志といふくもろし

(竹取下四)

義興といふ所は只堪といふ人ありわ
うりしてあつたれ吏となる其れ荊
溪といふ川なりある時川邊にて
大なる螺をばりて取きて來て
おくよるるらんさ女となす只
堪よりびくおの妻とて人々名づ
くる標婦といふしあつたのあつた
をアといふもいふてはさく思ひ只
堪をせめていふそ又標蟻毛といふ物
ありそそかかしてそよきつはゆが
妻なまをさすは只堪をよつてそ
まは然り標婦といふは只堪の事

竹取抄

なりともさうもに大なる蝦蟆也毛と
 しふきをあしひくひらりあざむくあざむく
 ともゆまするがこれいもはなはさう
 は鬼習をとりまれとてふは堪ふ
 りくまはさうもあたまをさしおとせ
 らせしりうらむくあざむくあざむく
 くあたまをさしおとせしるあたまを
 しき鬼の習しあざむくあざむく
 つまははてもちあざむくあざむく
 つひひくはなはさうも及むあたまを
 思ひてあたまをさしおとせしるあたまを
 とりあたまをさしおとせしるあたまを

はおもと標婦のいもをさうもに
 歎の名なりいもそれもとて須臾は
 とうまうくあまのちよひあま其け
 ともをえあまの常れあまのいも
 斗あまのいもとあまの標婦曰は歎は火
 を食ふいも火れあまのいもあまの
 あまのいもあまのいもあまのいも
 とあまのいもあまのいもあまのいも
 ともあまのいもあまのいもあまのいも
 ともあまのいもあまのいもあまのいも
 ともあまのいもあまのいもあまのいも
 ともあまのいもあまのいもあまのいも
 ともあまのいもあまのいもあまのいも

お淨れらるゝのめりや好言よ帝よはい
 せよぞとさへさへしなると云ハ甘澤遙
 唐の武と思ふまよ素娥やいあり
 美流よりして歌を解をよるすその比
 賢人のさへもあつ秋仁傑素娥の
 事だつて其歌を舞をえんて武
 と思此許よりしに素娥俄にわ
 てるとす武と思ふとて隈にお
 へて舞のまゝしよと蘭麝ののり
 ありいづれもまよるすし
 いよ一人間のいふまゝすまは花
 月の精なる人の事と人を同り

竹取下五十

つとてさへきとらめらつて
 といさむきつたうい戸賢人乃
 徳よおまゝてこり方清くまぬこ
 とくしておまゝなうぬあわう
 此説はおもひてちかかなし
 前この説をしていあらや姫ハ河同大
 の林のやうにゆきうはよ唐土を
 又よは本よ揚光妃の祖ある事を
 記せしむ此熱田の林をこしこれハ
 小田土をむまむ日本といふ熱田をさ
 草の葉とてよなり俗説し一玄宗
 宮中一わのほのむこしつらんむん

竹取抄

しうぞ。熱田の神。美めと化して。唐
 此をを乱し。経つ。馬鬼として失
 ひをりし時。さあひより白きい
 て。東よる去る。その時。熱田
 の神。體なりと云し。此説深きし
 と。いづも。尾張風土記。曰。富樫山。有
 神号白鳥。神。日本武尊所化。白鳥也
 云。さうんぞ。あつ。の神。體ハ。云
 なる。本。四き。て。堅瓠。素と云
 ふ。よ。楊。も。此。ハ。白。鷲。の。精。なり。故
 又。其。爪。甲。赤。銅。の。ごと。く。なり。し。と。云
 白鷲。も。さ。う。こと。なる。行。を。は。事。よ

(抄下五二)

く合つ。長恨歌。よ。さ。菜。之。よ。い
 き。う。く。揚。妻。妃。の。あ。つ。は。事。ハ。白。鷲。ハ
 くらに記して。異聞ををらむ。ふ。り
 きの。記

下華 藤原像

竹取抄

我子よーヤブのいもめあはは竹
 けのけえういおゆ〜ゆゆゆゆゆゆ
 りあえん〜ゆをい〜ゆをい〜ゆをい
 志い〜人〜乃志〜里をすのれ福あう紀
 よ子のこす〜あ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
 節布〜ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 木のつち〜ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 まゆ〜ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 の葉りあ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
 るあ〜ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

據今將一就其書而校正焉有力未能及者
深恐踈漏之不勉耳雖然伯氏之才之學則
吾春水先生之序也大方君子其勿歸
咎于伯氏幸甚

天明三年癸卯九月

弟 翔仲鵠謹識



弟 壽季鶴拜書

竹

天明四年甲辰夏四月

江戸日本橋三丁目

前川六左衛門

京都六角通御幸町西入

小川多左衛門

大阪南久太郎町心齋橋筋

柳原喜兵衛

書林

